

二〇二五年二月八日

小春日の障子を過ぎる鳥の影
宮島の鳥居射抜きて秋日落つ
苔寒し神話の国の力石
柿花火朝日が包む一軒家
庭手入れ済みしましたかと色鳥来
冬うらら寝顔のままに母逝きぬ
臨終の祈りの窓に寒夕焼
石路の花日差しに応ふ窓辺かな
歌碑巡る枯葉の径を踏み鳴らし

二〇二五年二月七日

立冬の日だまりに読む一句集
穏やかに冬立つ朝や鋤仕事
庭石の窪みの翳や石路の花
ゴンドラの影の縫ひゆく紅葉山

二〇二五年二月六日

心字池縁取る石路の花明かり
どんぐりやちゃんと呼び合ふいとこ会
冬霧の大和三山漂ひて

二〇二五年二月五日

米寿の師喜寿の子集ふ菊日和
行く秋や束の間の陽を纏ふ樹々

澄子

康子

もところ

山椒

うつぎ

せいじ

あひる

よし女

明日香

みきお

千鶴

うつぎ

康子

康子

ほたる

明日香

みきえ

和繁

二〇二五年二月四日

海原の深き藍色秋深かむ
落葉敷く野外チャペルの石の椅子

二〇二五年二月三日

ひつぢ田の尖る葉先に雨の珠
鳥どちのレストランめく七竈
踏まずんば参拝ならず銀杏の実
折り鶴を孫に褒められ文化の日

二〇二五年二月二日

倒されど神輿太鼓の鳴り止まず
夕映えの天守に架かる時雨虹
御神燈仕舞ひて末社冬に入る

なつき

むべ

えいじ

むべ

うつぎ

康子

みきえ

千鶴

あひる

毎日句会みのる選・二〇二五年二月一日